

1-3

認知症の種類と診断治療



認知症と言ってもさまざま

まずは病気の種類と診断、治療、見通しを知ろう！

認知症の症状を呈するさまざまな病気

ものの忘れが
目立つようになった

これまでと比べて
意欲がない

怒りっぽくなった

など

認知症を疑う症状が出てきたとき、どんな病気が考えられるでしょうか？

主な病気を示します。

● アルツハイマー型認知症

認知症を呈する最も代表的な病気で、認知症のうちの6～7割を占めるとされています。

ものの忘れが目立つところから始まることが多く、最初の頃は買い物などもできますが、進んでくると一人での外出が難しくなり、着替えや洗濯なども難しくなってきます。

● 血管性認知症

脳梗塞や脳出血をもとに認知機能低下をきたす病気です。

認知機能低下の他に、手足の麻痺や言葉が出にくいなどの症状を伴うことも多いです。

● レビー小体型認知症

そこにいない人や動物が見えるなどの幻視を伴うことが多い病気です。

小刻みの歩行や手が震えるなどのパーキンソン症状や、睡眠中に夢にあわせて大きく手足を動かしてしまう「レム睡眠行動障害」を伴う場合もあります。

● 前頭側頭型認知症

常識から逸脱した行動をしてしまう（万引きなど）、決まった時間に決まった行動をしたりする時刻表的行動など判断力低下や脱抑制が目立ったり、逆に感情が鈍くなり他の人に共感ができない、などの症状をきたします。

この他にも、以下のような状態や病気があることも知っておきましょう。

○ 軽度認知障害（MCI）

どのような認知症の病気も前段階と言える状態を経ることが多く、前段階の状態を軽度認知障害〔Mild Cognitive Impairment（MCI）〕と呼びます。

この時期には慣れたことの多くは自分で行うことができますが、検査をすると年相応に比べて明らかに認知機能が鈍っていることがわかります。

○ 慢性硬膜下血腫

頭を打って2～3か月後などに脳の周りに血腫がたまり、動作が鈍くなったり、気力がない、もの忘れが目立つなどの症状が出てきます。

頭のCT検査などですぐに診断ができますので、おかしいと思ったら、早めに受診することが大切です。

○ 正常圧水頭症

もの忘れ、尿失禁、歩行障害の3つを代表的な症状とする病気で、脳脊髄液が脳の中に余分に溜まって起こる病気です。

数か月～数年単位で病気が進行します。CT検査などで診断を受け、脳脊髄液が溜まりにくくする手術を受けると症状が改善します。

○ ビタミンB₁₂欠乏症

血液中のビタミンB₁₂の不足によって起こります。

手術で胃を全摘出している場合や高齢期に胃からの吸収が低下している場合に起こります。血液検査の測定により診断がつき、不足分を補充することで症状が改善します。

○ 甲状腺機能低下症

“のどぼとけ”のすぐ下にある甲状腺から出る体の代謝に必要なホルモンの分泌が低下することで起こります。

高齢者では認知症症状だけが出る場合もあるので、血液検査で測定し、ホルモンを補充する薬を飲みます。

他にも認知症症状を示す病気は多数ありますが、病気によって、治療法や見通しが異なるということを知っておき、医療機関で相談しましょう。

認知症の診断

認知症の診断では、認知症を疑う症状が出てきた場合、症状、診察、認知機能検査、採血、頭部画像検査などで、どのような病気が見極めてもらいます。最近では、かかりつけ医や地元の診療所で相談し、そこから専門医や専門の医療機関を紹介してもらうのが一般的です。

病気の見極めが難しい場合や、もの忘れや判断力低下などの認知機能の低下以外に被害妄想や怒りっぽさなどの精神的な症状や行動障害が強い場合、65歳未満で発症する若年性認知症が疑われる場合は、専門の医療機関での診察を必ず受けるようにしましょう。



認知症の治療

認知症の治療は病気によって異なります。

アルツハイマー型認知症やレビー小体型認知症では神経伝達を調節する薬があります。

血管性認知症では、脳梗塞の再発を防ぐ薬を処方してもらったり、脳梗塞や脳出血のリスク因子となる高血圧、糖尿病などの治療を継続します。

適度な運動や楽しい交流の機会をもつことも大切です。

被害妄想や易怒性（怒りっぽい）などが強い場合は非薬物療法として介護保険サービスを利用したり、家族が認知症のことをよく理解するために介護教室に参加したりすることが大事ですが、精神症状に対する薬を必要最小限、用いることもあります。

認知症の症状の変化や見通し

認知症は5年、10年という単位で長い時間をかけて徐々に進むことが多いです。

病気にもよりますが、発症初期はもの忘れが目立つものの、近所での買い物や慣れた調理などはできますが、進行すると着替えなどの動作やトイレの利用や入浴なども難しい場面が出てきます。

また、身近な人を認識することが難しくなったり、簡単な会話をを行うことも難しくなったりします。

病気や個人によっても異なりますので、症状の変化に合わせて周囲の人と相談しながら、環境を整えていきましょう。